

今月のみことば 2018年7月

「私はその小さな巻物を御使いの手から受け取って食べた。口には蜜のように甘かったが、それを食べてしまうと、私の腹は苦くなった。」(黙示録10章10節)

難解な箇所である。

ヨハネは神からの啓示を巻物として受ける。そこに書かれていたのは、悪がついに神のさばきを受ける時が来た、という苦難の中にある人々にとって「甘く」感じられるメッセージであった。しかし、口には甘かった巻物が、腹に入ると、途端に苦く感じられた。一体どういうことか。悪者は確かに悪者でも、私たちと関わりのある人かもしれない。全く無縁の人でもその人が悪人となった背景には、何か同情すべき事情があったかもしれない。それどころか、私たち自身がそもそも悪人ではないか。そうすると、自分が滅びを免れたことは確かに「甘い」経験であるが、この救いを知らずに滅びゆく人々に対しては耐え難い苦しみを覚えなくてはならない。これを「腹が苦くなった」とヨハネは表現した。



しかし、ここを全く別な角度から適用する見方を最近友人から教えられた。

蜜のように甘いメッセージとは、端的に言えば、神を信じてさえいれば、不幸や災いに遭うことはない、というご利益信仰のことだ、というのである。神は私たちの幸福を願っておられ、キリストを一回信じさえすれば、自分の願いどおりにことが進むという「甘い」話である、と。

ところが食べ物はやがて胃に入り、激しい痛みが起きる。なんとも言えない不快感、苦しみが生まれる。クリスチャンとなってから、むしろ問題は増え、信仰ゆえの苦しみに遭う。順風満帆どころか逆風が吹きささぶことさえある。「腹は苦くなった」というのはこの経験を指している、というのである。

改めて聖書を読み直すと、確かに、「狭い門から入れ」「自分の十字架を負ってわたしについて来なさい」「自分のいのちを得ようとする者はそれを失う」、としっかり書かれている。本当の福音は「良薬は口に苦し」のことわざのように、まず自我や自分の罪と向き合う苦しみを経てから経験するものである。

信者を増やそうとするあまり、キリスト教会が悔い改めより、福音の「甘い」面ばかりを強調してきたきらいはないだろうか。クリスチャンとなったはずなのに、かえって苦しくなると、教会を捨て、信仰を捨てる人々があとを絶たない。しかしその原因は、自我を捨てて悔い改める、という「口に苦い」経験を経ていない場合が多い。

本当の福音はそれとは真逆である。口には一時苦いが、腹には甘いのである。しばらくの間は苦しいが、その後は永続的に、キリストを友とする甘美な交わりの中に生かされる。苦しみに感謝できる。それこそは、



自分を捨て、十字架を背負ってキリストに従った結果である。私たちはどこかで根本的な間違いを犯してきたのではないか。キリストを信じる、というのは頭の知識以上のものであって、積極的に神のご意志に自分を委ねることであるのに、それを一回の信仰告白で事足り、としてきたのではないだろうか。キリストのことばという「岩」の上ではなく、自分の思いという「砂」の上に家を建てた人の家は、嵐に襲われるとひとたまりもなく壊れてしまったという譬え(マタイ7章)は、「安価な恵み」

(ナチス政権のもとで殉教したドイツ人牧師、ボン・ヘッファーのことば)の結末を厳粛なまでに示している。